

平成14年11月23日から12月7日までの間、ケニアとマラウイとの技術交換を目的として、SMASSEケニアのジググナー氏(Head of INSET unit) とともにマラウイに出張しました。

現在マラウイではドマシ教員養成大学が位置するマラウイ南東地区をパイロット地区として、現職高校教員再訓練(In-service education and training: INSET)の実施が計画されています。今回の出張は、パイロット地区におけるニーズアセスメント調査への技術支援と、第2回INSET関係者会議への出席が目的で行われました。また同時に近隣地区の学校訪問を行い、マラウイの中等教育環境の調査も行いました。

ニーズアセスメントはプロジェクト対象地区における中等理数科教育の問題点や教授法改善に関する教師や生徒の要望を学校レベルにおいて調査し、INSETのカリキュラム、適正な教授法開発の基礎情報とすることを主眼として行われました。実際のフィールド調査はドマシ教員養成大学のスタッフにより終了しており、今回はデータ分析と報告書の作成方法、第2回関係者会議での発表内容、方法についての技術指導を行うことが主目的でした。

ニーズアセスメントと学校訪問調査の結果から、マラウイの中等教育の問題点としては、次の三点をあげることができるでしょう。(1)無資格教員の問題、(2)学校施設・教育資材不足の問題、(3)教授法、教授内容等の教育の質の問題です。教師の資格については、調査対象地区の教師の7割がT2と呼ばれる小学校教員資格しか所持しておらず、中等教育教師として最低限必要である教科内容等を理解せずに教壇に立っていることが判明しました。また学校設備では、一部のミッション系、政府系の学校では理科室、実験器具、薬品が揃っていましたが、マラウイ中等教育で8割を占めるCDSS(Community Day Secondary School)においては、普通に授業を行う一般教室の不足や資機材不足が深刻であることがわかりました。CDSSの中には校舎と教師を小学校と共有し、午前中は小学校、午後は中学校という二部構成にて学校を運営している事例も見られました。教授法の問題については、教員自身の欠席、自習授業、飲酒など、教壇に立つ以前の低モラルの問題をはじめとして、内容不理解に起因する間違っただけの内容の教授や黒板のみを使用した講義形式の授業(Chalk and Talk)が見られました。

教員の資格に関してはカナダのCIDAによる遠隔教育プロジェクト(SSTEP)がドマシ教員養成大学で実施されており、中等教員の有資格化に成果をあげています。また学校施設、資機材支援については各援助機関やNGOにより地道に実施されています。現職教員に対する再訓練については、現地においても実施に対する要望が強く、教育の質の改善のためにも必要性は高いと思われます。SMASSEケニアとしてはケニアの現職教員再研修の経験をマラウイに生かすことができるので、今後この分野に関する技術支援を行っていく予定です。

マラウイのパイロット地区における現職教員再訓練実施に際しては、教育省の主体性、実施形態、予算措置に関する問題を解決しなければなりません。今回、第2回INSET関係者会議を実施しましたが、一日では十分な話し合いができず、プロジェクト実施者としてのマラウイ教育省の主体性がまだまだ醸成できていないと言えるでしょう。また、プロジェクト実施者として、現在はドマシ教員養成大学の理数科教員を考えていますが、通常の教員養成課程やCIDAプロジェクト(SSTEP)の業務に忙しく、INSET事業に時間を割くのが難しい状況になっています。今後はINSET実施スタッフと業務時間の確保が問題になると思われます。予算措置についても、事業開始時にJICAからの支援を得ることはともかくとして、恒常的には自立発展性を考慮して、マラウイ教育省による予算の確保が求められます。

ASEI(Activity, Student, Experiment, Improvisation)の考え方を基本とした、理数科教育の実践については、SMASSEケニアでの豊富な経験と成果が、その有効性を証明しています。教師の態度変化を目的としたSMASSEプロジェクトの考え方、実践方法は、中等教育環境が恵まれているとはいえないマラウイに適用可能であり、また非常に有効で、かつ効果的であると考えられます。今後もマラウイの教育事情を考慮しつつ、研修員受け入れや専門家派遣等による技術協力を通じたケニア - マラウイ間の協力、交流を行い、両国の理数科教育が改善されることを願っています。